

ディプロマ・ポリシーの理解度・達成度評価の現状分析

佐藤 友紀, 川田 教平

Analysis of the Understanding and Achievement of Diploma Policy

SATO Tomonori, KAWADA Kyohei

2023年10月31日受理

抄 録

本研究では、ディプロマ・ポリシー（DP）の達成度評価を目的として、DPの理解度評価、DPに対応したアンケートによるDP達成度評価を実施した。DP理解度については、DPの説明前後による比較よりDPの理解度が深まることが認められた。DP達成度については、全体の傾向、学年間の違い、質問項目ごとの特徴が明らかとなった。DPの理解度調査から、DPの説明を工夫し、学修のなかで学生にDPを意識させることがDPの達成度の向上につながると考えられた。今後、DP達成度評価を継続し、学年を追うごとの達成度変化を観察することで、DPの趣旨に沿った評価となっているのかという視点で検証を追加していくこと、DP達成度評価項目とカリキュラムマップとの整合性を高めることが必要であると考えられた。

キーワード：ディプロマ・ポリシー、学修成果、可視化、教学マネジメント、達成度

はじめに

教学マネジメント構築を推進する活動が本学においておこなわれてきたなか、2020年、文部科学省より教学マネジメント指針が公表された。この教学マネジメント指針において、教学マネジメントは、「大学がその教育目的を達成するために行う管理運営」と定義され、教学マネジメントを構築するために、「3つのポリシーのもと、体系的、組織的な教育の展開をおこない、どのような人材を育てるのかを、学修成果の観点からディプロマ・ポリシー（DP）の評価を主に点検・評価（把握）をおこない、学修の質向上に向けた改善に取り組むこと」ことが求められている¹⁾。

教学マネジメントを構築していくうえで学修成果の可視化は最重要事項として捉えられる。学修成果と考えられる情報には様々なものが含まれ、かつ様々な方法がある。国家試験の合格状況、文部科学省が実施している全国学生調査などがその例であり、大学によって独自に開発・実施している方法もある^{2) 3)}。なかでも、4年間の学びの

成果として DP の達成度を測定することが評価の中心的役割である^{1) 4)}。

静岡理学療法学科では、2022 年度より DP の達成度評価、DP の理解度調査を開始した。本研究では、DP の達成度、DP の理解度について分析を行い、現状把握と課題を明らかにすることで、DP 達成度評価の改善・向上に向けての参考とすることを目的とする。

対象と方法

2022 年度、静岡理学療法学科の学生を対象に DP の理解度・達成度調査を実施した。調査内容、対象、頻度、実施時期、方法、タイプについては表 1 にまとめた。

DP 理解度調査は新入生である 1 年生 64 名を対象とした。表 2 に示すよう、DP、静岡理学療法学科の DP の 2 項目について聴取した。回答は、1. よく知っている、2. 知っている、3. どちらともいえない、4. あまり知らない、5. 全く知らない、の 5 段階評価とした。1 回目の調査は教養セミナー第 1 回（4 月）、2 回目の調査は第 14 回教養セミナー（7 月）にそれぞれ実施した。教養セミナー第 1 回に実施した DP の理解度調査後に、教養セミナー担当教員 1 名が静岡理学療法学科の DP の各項目についての説明を 1 年生全員におこなった。

DP 達成度については、2 年生 50 名、3 年生 73 名、4 年生 50 名を調査対象とした。調査項目は、常葉医療系コモンルーブリックに評価すべき具体的な力として取り入れた 10 項目とした（表 3）⁴⁾。DP を具体的な力に置き換えて聴取することを、聴取前に文書、口頭にて説明した。回答については、1. 身につけている、2. ある程度身につけている、3. どちらともいえない、4. あまり身につけていない、5. 全く身につけていない、の 5 段階とした。

統計学的解析として、教養セミナー第 1 回と第 14 回における DP の理解度についての比較は Mann-Whitney の U 検定を用いた。DP の達成度評価における質問項目ごとの学年間の差の検討には Kruskal-Wallis 検定を用い、差が認められた質問項目について、Bonferroni の不等式による多重比較を行った。統計処理には IBM SPSS statistics Ver. 22 を用いた。危険率 5 %未満を有意とした。

表 1 DP 理解度・達成度の調査概要

	調査内容	対象	頻度	実施時期	方法	タイプ
1	DP 理解度	1 年生 (新入生)	毎年	4 月教養セミナー (第 1 回)	アンケート	間接
2	DP 理解度	1 年生	毎年	7 月教養セミナー (第 14 回)	アンケート	間接
3	DP 達成度	2 ～ 4 年生	毎年	4 月ガイダンス	アンケート	間接

表 2 DP 理解度調査の質問項目

質 問	内 容
質問 1	“DP” とは、どのようなものか知っていますか？
質問 2	“静岡理学療法学科の DP” は、どのようなものか知っていますか？

表 3 DP 達成度評価の質問項目

質 問	内容および説明文
質問 1	“前年度学んだ理学療法士としての専門的知識” は身につきましたか？
質問 2	“前年度学んだ理学療法士としての実践力” は身につきましたか？
質問 3	<p>“判断する力” は身につきましたか？</p> <p>“判断する力” とは以下を指します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・与えられた情報をうのみにせず、様々な観点から検討する ・問題の本質を考える ・やるべきことを緊急度と重要度の観点から捉える
質問 4	<p>“主体性（実践力）” は身につきましたか？</p> <p>“主体性（実践力）” とは以下を指します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら行動にとりかかり、実行に移すことができる ・状況を見ながら、計画や行動を柔軟に変更することができる
質問 5	<p>“自己変革（自己創出力）” は身につきましたか？</p> <p>“自己変革（自己創出力）” とは以下を指します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者と自己の違いを認め、自己の強みを認識することができる ・常に何かを学ぼうとする視点を持ち、自己の成長に生かすことができる
質問 6	<p>“共感力（親和力）” は身につきましたか？</p> <p>“共感力（親和力）” とは以下を指します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な考えを受け入れることができる ・豊かな人間関係を築くことができる
質問 7	<p>“協働力” は身につきましたか？</p> <p>“協働力” とは以下を指します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者と互いに協力して物事を進めることができる ・他者の状況を理解しながら物事を進めることができる（補完し合う） ・他者の相談に乗る、他者にアドバイスをする

質問8 “規範意識（規律性）”は身につきましたか？
 “規範意識（規律性）”とは以下を指します。
 ・大学や社会のルールを守ることができる
 ・医療人としての倫理観を自覚できる

質問9 “表現力”は身につきましたか？
 “表現力”とは以下を指します。
 ・自分の考えを表現できる

質問10 “傾聴力”は身につきましたか？
 “傾聴力”とは以下を指します。
 ・相手の話を尊重して聞くことができる

結果

1年生を対象にしたDP理解度調査についての結果を図1に示す。第1回の調査では、質問1の「DPとは何か」、質問2の「静岡理学療法学科のDPについて」、ともに「あまり知らない」、「全く知らない」が70%以上を占め、半数以上の学生はDPについて知らない状況であった。第14回の調査においては、「あまり知らない」、「全く知らない」は、質問1で34%、質問2で44%に減少し、「よく知っている」、「知っている」がそれぞれ14%、11%から43%、25%と増加し、第1回と第14回の調査結果の比較において、有意差が認められた（表4 $p < 0.01$ ）。

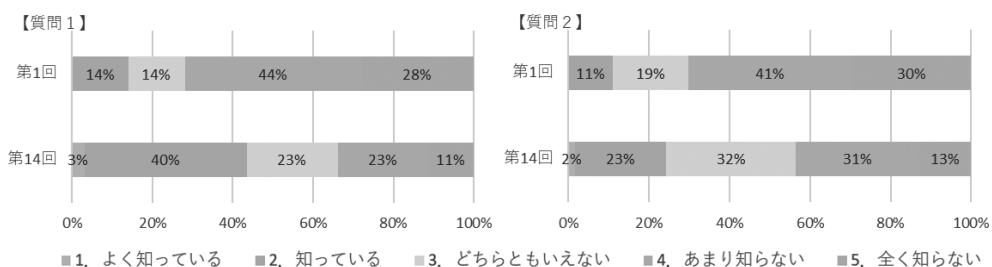


図1 DP理解度

表4 第1回と第14回DP理解度調査における比較

	前（4月）	後（7月）	p 値
質問1	4 (3-5)	3 (2-4)	0.000
質問2	4 (3-5)	3 (3-4)	0.001

表中の数値は中央値（四分位範囲）を示す

2年生以上を対象に実施したDP達成度の結果を図2に示す。質問10を除く質問項目において、3年生よりも2年生、4年生の方が「身についている」「ある程度身についている」の占める割合が多く、特に質問1と質問2、質問3、質問4でその差が顕著であった。

学年を隔てることなく、質問項目ごとにDPの達成度の違いを見ると、質問4、質問5と質問9において、「身についている」「ある程度身についている」の占める割合が少ないことが分かる。質問6、質問7、質問8、及び質問10では、「身についている」「ある程度身についている」の占める割合が多かった。

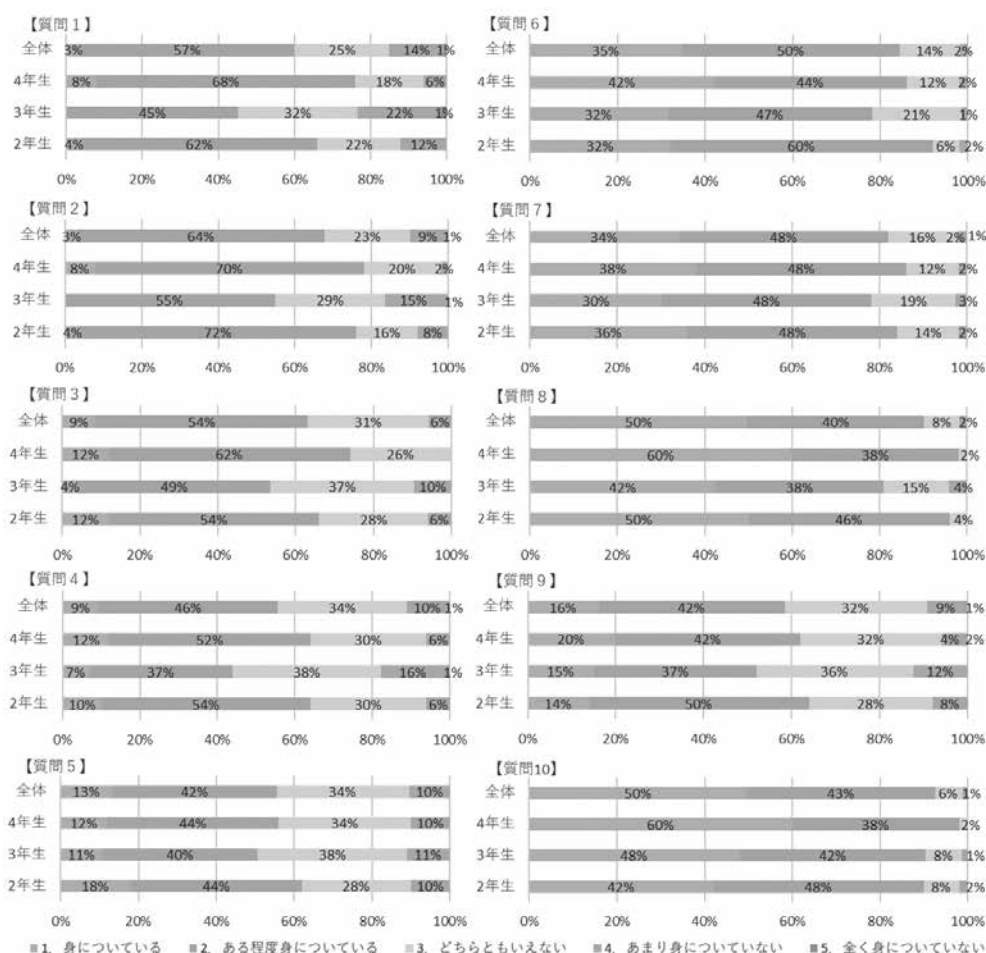


図2 DP達成度

質問項目ごとに学年間の違いがあるか見ていくと、質問1 ($p < 0.01$)と質問2 ($p < 0.01$)、質問3 ($p < 0.05$)、質問4 ($p < 0.05$)、質問8 ($p < 0.05$)において学年間に有意差が認められた。他の質問項目では3群間の差は認められなかった(表4)。

さらに、詳細に見ていくと、質問1と質問2、質問3、質問8では、3年生と4年生の間に有意差が認められ ($p < 0.05$)、3年生より4年生の方が身につけている学生が多いことが明らかとなった(図3)。また同質問において、2年生と3年生間に有意差は認められなかったが、3年生より2年生の方が身につけている学生が多い傾向が示された。2年生と4年生間で有意差は認められなかった。質問4では各学年間で有意差は認められなかったが、3年生よりも2年生、4年生で身につけている学生が多い傾向を示した。

表5 質問項目ごとの各学年間の調査結果

	2年	3年	4年	p 値
質問1	2 (2-2)	3 (2-3)	2 (2-2)	0.000
質問2	2 (2-2)	2 (2-2)	2 (2-2)	0.001
質問3	2 (2-2)	2 (2-2)	2 (2-2)	0.018
質問4	2 (2-2)	3 (2-3)	2 (2-2)	0.016
質問5	2 (2-2)	2 (2-3)	2 (2-2)	0.430
質問6	2 (1-2)	2 (1-2)	2 (1-2)	0.336
質問7	2 (1-2)	2 (1-2)	2 (1-2)	0.448
質問8	2 (1-2)	2 (1-2)	1 (1-1)	0.032
質問9	2 (2-2)	2 (2-2)	2 (2-2)	0.387
質問10	2 (1-2)	2 (1-2)	1 (1-1)	0.114

表中の数値は中央値(四分位範囲)を示す

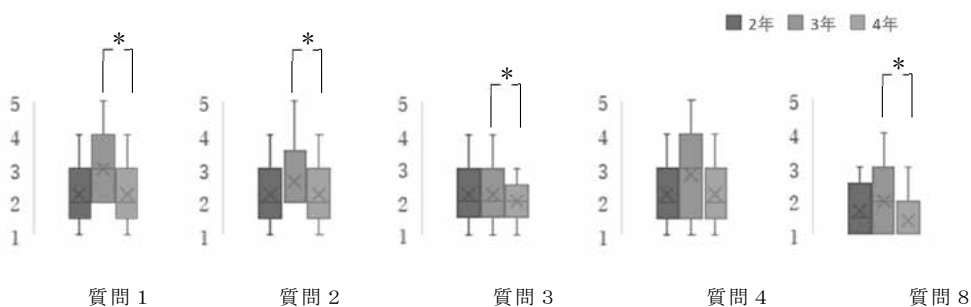


図3 質問1から質問4、質問8における学年間の比較

*は $p < 0.05$ を示す

考察

DPの達成度評価の完成度を高めていくためには、学生がDPを理解していること、学びのなかで学生がDP意識すること、カリキュラム改善を含めた教育効果を高めること、DPの達成度評価の精度を高めていくことが必要であると考えられる³⁾。そこで第一に、新入生が入学時の段階でDPについてどの程度理解しているのか知る必要があると考え、DPの理解度調査を第1回教養セミナーで実施した。その結果、半数以上の学生がDPについて知らないという状況が明らかとなった。第1回教養セミナーで実施したDPの理解度調査後に、静岡理学療法学科のDPについて理解を深めるための説明をおこなった。第14回教養セミナーで改めてDPの理解度調査を実施し、第1回目と第2回目の理解度調査の結果の比較から、DPの理解度が高まったことが認められた。これは、第1回教養セミナーでDPの理解度調査後に実施した静岡理学療法学科のDPについての説明により、DPについての学生の意識・理解が高まったことによるものと考えられる。

DP達成度における学年ごとの比較として、学年が上がるにつれ達成度が高くなることを予想した。しかしながら、3年生より2年生と4年生においてDPの達成度が高い傾向が認められた。この理由を特定することはできないが、少なくとも3年生は他学年よりDP達成度が低いことは事実であるため、4年次教育において、DP達成度を高めるための教育の工夫が必要である。

DP達成度の評価結果を学年隔てることなく、全学年をまとめ質問項目別に見た結果、質問4“主体性”、質問5“自己変革”、質問9“表現力”の達成度が低い傾向が認められた。学生の視点から考えられる要因として、それぞれの項目に掲げた具体的な力をいつ、どこで、どのように高めることができるのかが明確でなく、それぞれの力の修得についてイメージが沸きにくいことが挙げられる。一方、教育を提供する側の立場から、どの授業において、主体性、自己変革、表現力のそれぞれの力を学ぶことができるのか、どのような方法でそれぞれの力を高めていくのかをシラバス等で示すことができていることが要因にあると考えられる。

DP達成度の評価結果を質問項目ごとに学年間の違いがあるか分析した結果、質問1と質問2、質問3、質問8では、3年生より4年生においてDP達成度が高いことが認められた。知識、実践力は授業で学ぶものとして学ぶ場、学ぶ対象が明確であることから、3年生は新型コロナウイルス感染拡大による1年次のオンライン授業の影響があると考えられる。質問8は倫理観を含めて規範意識とし、それらが身についたかを聞く内容である。倫理観を評価するためには、倫理的な判断を要する状況や条件が具体的に限定されている必要があることから⁵⁾、3年生は病院実習に参加する前の段階であり、4年生に比べ実際に倫理的判断を必要とする経験がない結果の表れであると考えられる。

今後の展望

1年生に実施した静岡理学療法学科のDPの説明として、パワーポイント2枚に

DPを提示し、説明した。また、DPに到達するためにはカリキュラムに配置されている科目を順次履修し、単位を修得していくことを、カリキュラムツリーを用いて説明した。しかし、DP達成度の評価項目がDPそのものではなく、具体的な力に置き換えていることを鑑みれば、DPの達成度調査に使用している文言を説明時に取り入れ、丁寧に説明することでDPの理解がより深まるものと考えられる。このように、DPの達成度評価を見据えた説明をしていくこと、及び4年後にどうなっていたいから何が必要であるのかなどを伝えていくことで、学生へのDPの理解も高まり、DPを意識した学修への取り組みに結び付くのではないかと考えられる。

DP達成度評価について、今回初めての試みであったため、同学生が学年進行した際にDP達成度がどのように変化するのは見ることができなかった。今後、DPの達成度評価を継続し、学年進行に伴うDPの達成度の変化を観察することで、DP達成度における学生の傾向、DP達成度評価の課題などが見えてくると思われる。また、評価を継続していくことで、学生がDPと向き合う機会が増え、DPの理解が深まりDP達成度が高まることが予想される³⁾。

DPは記述の抽象度が高いと言われ、大学の規模や種類に関わらず似たような能力が設定されている⁶⁾。しかし、本学科のDPには「理学療法士」という言葉が使用され、逆に特定の環境に限定しているDPが設定されていると感じた。そのため、DPを具体的な力に置き換え、汎用能力の視点から整理した質問項目として学生に分かりやすく示した。学生に分かりやすい表現で示す一方、それぞれの力をどの授業で学ぶことができるのかが不明確となり、カリキュラムマップとの分断が生じた。また、学科としての特徴が見えにくくなったことも事実であろう。今後、カリキュラムマップとの整合性を高め、学科としての特徴を評価に取り入れることで、完成度の高いDP達成度評価が結び付くと考えられる。

最後に、学修成果の評価における問題点である「数値可能な学修成果への切り詰め」に触れる。学修成果の評価には量的評価と質的評価があるが、アカウントビリティが求められる今日の現状から、量的評価が学修成果の評価に取り入れられることが多くなっている⁷⁾。この理由として、統計的分析にかけやすいことが挙げられる。その結果、方法論を重視した学修成果の評価手法の導入につながり、評価手法が正当な理解をされずに使用されるといった悪循環に陥ることが考えられる。今回の考察から分かるよう、統計的分析による結果よりもむしろ、学修成果の評価活動の振り返りから評価に関する改善点が見出されている。学修成果の評価を、何のために、誰のためにおこなうのかを念頭に置き、学修成果の評価ツールを向上させていくことも必要ではないだろうか。

まとめ

今回、静岡理学療法学科として初めて、DP理解度調査、DP達成度調査を実施した。1年生を対象にしたDP理解度については、現時点における学生のDPに対する理解度が明らかとなった。2年生から4年生を対象にしたDP達成度調査については、

達成状況として全体の傾向、学年間の違い、質問項目ごとの特徴が見られた。

教学マネジメント指針において、学修成果とは「学修者本位の教育の観点から、一人一人の学生が自らの学修成果として身に付けた資質・能力を自覚できるようにすることが重要である。」と述べられている。“学修者本位の教育の観点”を重視しながら、現在の評価を向上させ、教育の質の改善につながる学修成果の可視化の確立を図りたいと考える。

参考文献

1. 中央教育審議会大学分科会：「教学マネジメント指針」令和2年1月22日.
2. 中央教育審議会大学分科会教学マネジメント特別委員会（第6回）：「学修成果とその可視化」令和1年7月5日.
3. 畠田敏行、太田寛行. ディプロマ・ポリシー達成度に注目した学修成果の把握について — 茨城大学における入口から出口までに追跡結果から — 大学評価とIR — 第12号 令和3年（2021年）5月.
4. 佐藤友紀、中澤寛元、出口憲、川田教平、安藤雅之. 学修成果の可視化実現にむけて —活動報告— 常葉大学教育学部紀要 第42号 令和4年（2022年）3月.
5. 権永詞. 「倫理観」を測ること CUC VIEW & VISION N0.52.
6. 田尻慎太郎. 間接評価を用いたディプロマ・ポリシー到達度の計測 第7回大学情報・機関調査研究集会 平成30年.
7. 松下佳代：「学修成果とその可視化」高等教育研究 2017年 第20集 93-112ページ.

